Ⅲ・白文に挑戦（その3）

錬成編

1 『唐宋八家文読本』巻四「送温処士赴可陽軍序」唐・韓愈

伯楽一過冀北之野、而馬群遂空。夫冀北馬多於天下。伯楽雖善知馬、安能空其群耶。解之者曰、「吾所謂空、非無馬也、無良馬也。伯楽知馬。遇其良、輒取之、群無留良焉。苟無良、雖謂無馬、不為虚語矣。」

〇温＝温造。人名。可陽軍節度使であった鳥重胤の目にとまり引き抜かれる。〇処子＝仕官しない在野の人。
〇冀北之野＝良馬の産地である冀州の北部。

伯楽一たび冀北の野を過ぎて、馬群遂に空しと。夫れ冀北の馬は天下に多し。伯楽善く馬を知ると雖も、安んぞ能く其の群を空しくせんや。之を解する者曰はく、「吾が所謂空しは、馬無きに非ざるなり、良馬無きなり。伯楽は馬を知る。其の良に遇へば、輒ち之を取り、群に良を留むることなし。苟しくも良無くんば、馬無しと謂ふと雖も、虚語と為さざらん。」

2 『本朝文粋』「富士山記」　平安・都良香

富士山者、在駿河国。峰如削成、直聳属天。其高不可測。歴覧史籍所記、未有高於此山者也。其聳峰鬱起、見在天際臨瞰海中。観其霊基所盤連、亙数千里間。行旅之人、経歴数日、乃過其下。去之顧望、猶在山下。蓋神仙之所遊萃也。貞観十七年十一月五日、吏民仍旧致祭。日加午天甚美晴。仰観山峰、有白衣美女二人、双舞山巓上。去巓一尺余、土人共見、古老伝云。

〇本朝文粋＝平安時代後期に編まれた六十八人の漢詩文集・427編。〇都良香＝平安時代前期の貴族・文人。漢詩に秀で歴史や伝記にも詳しく平安京中に名声を博す。〇『富士山記』＝当時の富士山の様子や伝説などを記載。

富士山は、駿河の国に在り。峰削り成せる如く、直に聳えて天に属けり。其の高きこと測るべからず。史籍の記る所を歴く覧るに、未だ此の山より高き者有らざるなり。其の聳ゆる峰鬱りに起こり、見るに天際に在りて海中に臨み瞰る。其の霊基の盤り連なる所を観るに、数千里の間に亙れり。行旅の人、数日を経歴して、乃ち其の下を過ぐ。之を去りて顧み望めば、猶ほ山の下に在り。蓋し神仙の遊萃する所なり。貞観十七年十一月五日、吏民旧に仍りて祭りを致す。日午に加はりて天甚だ美く晴る。仰ぎて山の峰を観るに、白衣の美女二人有り、山の巓の上に双び舞ふ。巓を去ること一尺余り、土人共に見つと、古老伝へて云ふ。

2024.05.19
by KENZOU

3 『孔子家語』巻二　魏・王肅

子路見於孔子曰、「負重渉遠、不択地而休、家貧親老、不択禄而仕。昔者由也事二親之時、常食藜藿之食、為親負米百里之外。親歿之後南遊於楚。従車百乗、積粟万鍾、累絪而坐、列鼎而食。願食藜藿、為親負米、不可復得也。枯魚銜索、幾何不蠹。二親之寿、忽若過隙。」孔子曰、「由也事親、可謂生事尽力、死事尽思者也。」

○孔子家語＝『論語』に漏れた孔子一門の説話をまとめたもの。○三国時代の魏の政治家。○藜藿＝粗末な食べ物。○百乗＝百台。○万鍾＝大量。○蠹＝そこなう。むしばむ。

子路孔子に見へて曰はく、「重きを負ひて遠きに渉れば、地を択ばずして休み、家貧しくして親老ゆれば、禄を選ばずして仕ふ」と。昔者由や二親に事へしの時は、常に藜藿の食を食し、親の為に米を百里の外に負へり。親歿せしの後南のかた楚に遊ぶ。従車は百乗、粟万鍾を積み、絪を累ねて坐し、鼎を列ねて食す。藜藿を食して、親の為に米を負はんと願うも、復た得べからざるなり。枯魚索を銜むとも、幾何か蠹せざらん。二親の寿、忽として隙を過ぐるが若し」と。孔子曰はく、「由や親に事ふるに、生事には力を尽くし、死事には思ひを尽す者と謂うべきなり」と。

4 『資治通鑑』唐紀・睿宗の条　北宋・司馬光

上将立太子。以宋王成器嫡長、而平王隆基有大功、疑不能決。成器辞曰、「国家安則先嫡長、国家危則先有功。苟違其宜、四海失望。臣死不敢居平王之上。」涕泣固請者累日。大臣亦多言、「平王功大、宜立。」劉幽求曰、「臣聞除天下之禍者、当享天下之福。平王拯社稷之危、救君臣之難。論功莫大、語徳最賢。無可疑者。」上従之。

○成器＝李憲。唐の第五代皇帝睿宗の長男で最初の皇太子。音楽に詳しく笛の達人で、いつも慎ましやかな態度を取って自らは政務に関わることを避けていたという。異母の庶弟に李隆基（唐の九代皇帝玄宗）がいる。隆基は即位後も兄成器に対しては常に敬意を払っていたという。○劉幽求＝重臣の一人。

上将に太子を立てんとす。宋王成器は嫡長なるも、平王隆基は大功有るを以て、疑ひて決する能はず。成器辞して曰はく、「国家安ければ則ち嫡長を先にし、国家危ふければ則ち有功を先にす。苟しくも其の宜に違はば、四海望みを失はん。臣死すとも敢て平王の上に居らじ」と。涕泣して固く請ふこと累日なり。大臣亦た多く言ふ、「平王は功大なり、宜しく立つべし」と。劉幽求めて曰はく、「臣聞く天下の禍を除く者は、当に天下の福を享くべしと。平王社稷の危を拯ひ、君臣の難を救ふ。功を論ずれば大なるは莫く、徳を語れば最も賢れり。疑ふべきこと無し」と。上之に従ふ。

5 『十八史略』巻二・西漢、文帝の条　南宋・曾先之

匈奴寇上群・雲中。詔将軍周亜夫屯細柳、劉礼次覇上、徐厲次棘門、以備胡。上自労軍、至覇上及棘門、直馳入。大将以下騎送迎。已而之細柳不得入。先駆曰、「天子且至軍門。」都尉曰、「軍中聞将軍令、不聞天子詔。」上乃使使持節、詔将軍亜夫。乃伝言開門。門士請車騎曰、「将軍約、軍中不得駆馳。」上乃按轡徐行至営、成礼而去。群臣皆驚。上曰、「嗟乎此真将軍矣。向者覇上・棘門軍児戯耳。」

○文帝＝前漢の第五代皇帝。中国史上の名君の一人とされる。○匈奴＝秦・漢時代にモンゴル高原で活躍し、漢民族の農耕社会を脅かした遊牧騎馬民族。○周亜夫・劉礼・徐厲＝共に漢の将軍。○細柳・覇上・棘門＝地名。○節＝天子の使者に授けられる旗印。

匈奴上群・雲中に寇す。詔して将軍周亜夫は細柳に屯し、劉礼は覇上に次し、徐厲は棘門に次し、以て胡に備へしむ。上自ら軍を労し、覇上及び棘門に至り、直馳して入る。大将以下騎して送迎す。已にして細柳に之くに入るを得ず。先駆曰はく、「天子且に軍門に至らんとす」と。都尉曰はく、「軍中には将軍の令を聞き、天子の詔を聞かず」と。上乃ち使ひをして節を持せしめて、将軍亜夫に詔す。乃ち言を伝へて門を開かしむ。門士車騎に請ふて曰はく、「将軍約す、軍中には駆馳するを得ず」と。上乃ち轡を按じ徐行して営に至り、礼を成して去る。群臣皆驚く。上曰はく、「嗟乎此れ真の将軍なり。向者の覇上・棘門の軍は児戯のみ」と。

6 『史記』仲尼弟子列伝第七　前漢・司馬遷

端木賜衛人、字子貢、少孔子三十一歳。子貢利口巧辞。孔子常黜其弁。問曰、「汝与回孰愈。」対曰「賜也何敢望回。回也聞一以知十。賜也聞一以知二。」陳子禽問子貢曰、「仲尼焉学。」子貢曰「文武之道未墜於地、在人。賢者識其大者、不賢者識其小者。莫不有文武之道。夫子焉不学。而亦何常師之有。」

○端木賜＝孔子の弟子・子貢。弁舌に優れ外交手腕を発揮。○回＝顔回。孔門十哲の一人で随一の秀才。○陳子禽＝孔子の弟子で儒学者。○文武之道＝文王・武王以来の周の伝統。

端木賜は衛の人、字は子貢、孔子より少きこと三十一歳。子貢は利口巧辞なり。孔子常に其の弁を黜く。問ひて曰はく、「汝と回と孰れか愈れる」と。対へて曰はく「賜や何ぞ敢て回を望まん。回や一を聞きて以て十を知る。賜や一を聞きて以て二を知る」と。陳子禽子貢に問ひて曰はく、「仲尼焉くにか学べる」と。子貢曰はく「文武の道未だ地に墜ちずして、人に在り。賢なる者は其の大なる者を識し、賢ならざる者は其の小なる者を識す。文武の道有らざるは莫し。夫子焉にか学ばざらん。而して亦た何の常の師か之れ有らん」と。

7 『呉子』図国第一　戦国時代初期・呉起

武候嘗謀事、群臣莫能及。罷朝而有喜色。呉起進曰、昔楚荘王嘗謀事、群臣莫能及。退朝而有憂色。申公問曰、君有憂色何也。曰、寡人聞之、世不絶聖、国不乏賢。能得其師者王、得其友者覇。今寡人不才、而群臣莫及者。楚国其殆矣。此楚荘王之所憂、而君説之。臣窃懼矣。於是武候有慙色。

○呉子＝春秋戦国時代に著されたとされる「孫子」と併称される兵法書。○呉起＝中国戦国時代の軍人・政治家・軍事思想家。○武侯＝戦国時代の魏の君主。優れた君主で武侯の代にも魏は大きく伸張する。○荘王＝春秋時代の楚の第六代の王。春秋五覇の一人。

武候嘗て事を謀るに、群臣能く及ぶもの莫し。朝を罷めて喜ぶ色有り。呉起進みて曰はく、「昔楚の荘王嘗て事を謀るに、群臣能く及ぶもの莫し。朝より退きて憂ふる色有り。申公問ひて曰はく、『君憂ふる色有りとは何ぞや』と。曰はく、『寡人之を聞けり、世聖を絶たず、国賢に乏しからず。能く其の師を得る者は王たり、其の友を得る者は覇たりと。今寡人不才にして、而も群臣及ぶ者莫し。楚国其れ殆からん』と。此れ楚の荘王の憂ふる所にして、而も君は之を説ぶ。臣窃かに懼る」と。是に於て武候慙ずる色有り。

8 『五雑組』巻九　明・謝肇淛

余家海浜、常見異魚。一日有巨魚如山、長数百尺。乗潮入港、潮落不能自返、溌剌沙際。居民以巨木支口、割其肉至百余石。潮至復奮鰭浮出、不知所之。又有得巨魚脊骨為臼者、今見在。若非親見以語人、人豈信乎。宋高宗紹興間、漳浦海場有魚、高数丈。割其肉数百車。至剜目、乃覚転鰭、而旁艦皆覆。近時劉参戎炳文、過海洋、於乱礁上、見一巨魚横沙際。数百人持斧、移時僅開一肋肉。不甚美。肉中刺骨、亦長丈余。劉携数根、帰以示人。

○謝肇淛＝明代の文人・官人。○沙際＝砂浜。○紹興間＝紹興年間。○劉参戎炳文＝参戎（武官）の劉炳文。

余海浜に家し、常に異魚を見る。一日巨魚の山の如きもの有り、長さ数百尺。潮に乗じて港に入り、潮落ちて自ら返る能わず、沙際に溌剌たり。居民巨木を以て口を支へ、其の肉を割くに百余石に至る。潮至れば復た鰭を奮ひて浮かび出で、之く所を知らず。又た巨魚の脊骨を得て臼と為す者あり、今見に在り。若し親ら見て以て人に語ぐるに非ずんば、人豈に信ぜんや。宋の高宗の紹興間に、漳浦の海場に魚有り、高さ数丈。其の肉を割くに数百車あり。目を剜るに至りて、乃ち覚めて鰭を転じ、而して旁の艦皆覆る。近時劉参戎炳文、海洋を過ぎ、乱礁上に於て、一巨魚の沙際に横たはるを見る。数百人斧を持し、時を移して僅かに一肋肉を開く。甚だしくは美ならず。肉中の刺骨も、亦た長さ丈余。劉数根を携へ、帰りて以て人に示す。

9 『日知録』巻九　明末・清初　顧炎武

宋葉適言、「法令日繁、治具日密、禁防束縛、至不可動。而人之知慮、自不能出於縄約之内。故人材亦以不振。」今与人稍談及度外之事、輒揺手而不敢為。夫以漢之能尽人材、陳湯猶扼腕於文墨吏。而況於今日乎。宜乎豪傑之士、無以自奮、而同帰於庸懦也。故法令者、敗壊人材之具。以防姦宄、而得之者什三、以沮豪傑、而失之者什七矣。

○日知録＝清朝・顧炎武著。経学・史学・文学・政治・社会・地理・風俗等の分野について実証的に論じ、現実の政治や社会に対する批判精神や斬新な政治思想を展開。清朝学術の最高水準を示したものとされる。○葉適＝南宋の儒学者・官僚。○治具＝統治の手段。○陳湯＝前漢末の武将。○姦宄＝悪者。よこしまな者。

宋の葉適言ふ、「法令は日に繁に、治具日に密にして、禁防束縛せられ、動くべからざるに至る。而して人の知慮、自ら縄約の内より出づる能はず。故に人材も亦た以て振るはず」と。今人と稍談じて度外の事に及べば、輒ち手を揺つて敢えて為さず。夫れ漢の能く人材を尽くすを以てすら、陳湯も猶ほ文墨の吏に扼腕せり。而るを況んや今日に於てをや。宜なるかな豪傑の士、以て自ら奮ふこと無くして、同じく庸懦に帰するや。故に法令なる者は、人材を敗壊するの具なり。以て姦宄を防いで、之を得るもの什の三、以て豪傑を沮んで、之を失ふ者什の七なり。

10 『世説新語』捷悟第十一　宋・劉義慶

魏武嘗過曹娥碑下、楊脩従。碑背上見題作「黄絹幼婦外孫齏臼」八字。魏武謂脩曰、「解不。」答曰、「解。」魏武曰「卿未可言。待我思之。」行三十里、魏武乃曰、「吾已得。」令脩別記所知。脩曰、「黄絹色糸也、於字為絶。幼婦少女也、於字為妙。外孫女子也、於字為好。齏臼受辛也、於字為辭。所謂絶妙好辞也。」魏武亦記之、与脩同。乃嘆曰、「我才不及卿、乃覚三十里。」

○捷悟＝賢く理解が早いこと。○魏の武帝＝曹操。後漢末期の軍人・政治家・詩人で実質的な魏の創始者。○解不←解不解の下の解が省略されている。解否と同義。

魏武嘗て曹娥碑の下を過ぎ、楊脩従ふ。碑の背上に題して「黄絹幼婦外孫齏臼」の八字を作るを見る。魏武脩に謂ひて曰はく、「解するや不や」と。答へて曰はく、「解す」と。魏武曰はく「卿未だ言ふべからず。我が之を思ふを待て」と。行くこと三十里、魏武乃ち曰はく、「吾已に得たり」と。脩をして別に知る所を記さしむ。脩曰はく、「黄絹とは色糸なり、字に於て絶と為る。幼婦とは少女なり、字に於て妙と為る。外孫とは女の子なり、字に於て好と為す。齏臼とは辛を受くるものなり、字に於て辭と為る。所謂絶妙好辞なり」と。魏武も亦た之を記すこと、脩と同じ。乃ち嘆じて曰はく、「我が才は卿に及ばざること、乃ち三十里なるを覚ゆ」と。

11 『智囊』第一部　明末・馮夢龍（ふうぼうりょう）

郭進任山西巡検。有軍校詣闕訟進者、上召訊知其誣。即遣送進、令殺之。会〻幷寇入。進謂其人曰、「汝能訟我、信有胆気。今赦汝罪、能掩殺幷寇者、即薦汝于朝。如敗即自投河。毋汚我剣也。」其人踊躍赴闘、竟大捷。進即薦擢之。容小過者、以一長酬、釈大仇者、以死力報。唯酬報之情迫中、故其長触之而必試、其力激之而必竭。彼索過尋讐者、豈非大愚乎。

○智囊＝明代に編集された説話集。人間が切羽詰まった状況で働かせる知恵の様々を中国歴代の史書、小説などから選び抜いている。したたかな中国人の心理と論理の一端を知ることができる。○巡検＝宋代の軍政官。辺境地域の軍事・治安・官紀を統括。○闕＝宮城の門。ここでは宮城・朝廷の意。○誣＝事実でないでっちあげ。○幷＝幷州。地名。○寇＝外敵。○酬報＝むくいる。○竭す＝全部出しきる。○索める＝詮索する。○讐＝かたき。○尋ねる＝捜し求める、究明する。

郭進山西の巡検に任ぜらる。軍校の闕に詣りて進を訟ふる者有り、上召し訊ねて其の誣なるを知る。即ち進に送らしめて、之を殺さしめんとす。会〻幷に寇入る。進其の人に謂ひて曰はく、「汝能く我を訟ふは、信に胆気有り。今汝の罪を赦さん、能く幷の寇を掩殺せば、即ち汝を朝に薦めん。如し敗れば即ち自ら河に投ぜよ。我が剣を汚すこと毋かれ」と。其人の踊躍して闘ひに赴き、竟に大捷す。進即ち薦めて之を擢づ。小過を容せば、一長を以て酬い。大仇を釈さば、死力を以て報ゆ。唯だ酬報の情中に迫る、故に其の長之に触れて必ず試み、其の力之に激して必ず竭す。彼の過ちを索ね讐を尋ぬる者は、豈に大愚に非ずや。

12 『伝収録』巻上・第四十一条　明・王陽明

澄問、「有人夜怕鬼者、奈何。」先生曰、「只是平日不能集義、而心有所不慊、故怕。若素行合於神明、何怕之有。」子莘曰、「正直之鬼不須怕。恐邪鬼不管人善悪、故未免怕。」先生曰、「豈有邪鬼能迷正人乎。只此怕、即是心邪故有迷之者。非鬼迷也、心自迷耳。如人好色、即是色鬼迷。好貨、即是貨鬼迷。怒所不当怒、是怒鬼迷。懼所不当懼、是懼鬼迷也。」

○伝収録＝明の王陽明による儒学の教え・陽明学の入門書。○陽明学＝心を統治、練磨することの大切さを説き万物一体の考え方を理解し心の中の葛藤を無くして不動心を確立する考え方を基本とする。「知行合一・「事上磨錬」」。○義＝人としての正しい行い（利他心）。○澄＝陸澄。王陽明の高弟。○慊りる＝満足する。○神明＝神の心。神のような明らかな徳。○子莘＝王陽明の弟子。

澄問ふ、「人の夜鬼を怕るる者有り、奈何」と。先生曰はく、「只だ是れ平日義を集むる能はずして、心慊ざる所有るのみ、故に怕るるなり。若し素行神明に合はば、何の怕るることか之れ有らん」と。子莘曰はく、「正直の鬼は怕るるを須ひず。恐らくは邪鬼は人の善悪に管らず、故に未だ怕るるを免れず」と。先生曰はく、「豈に邪鬼の能く正人を迷はすこと有らんや。只だ此の怕れは、即ち是れ心の邪なるが故に之を迷はす者有るなり。鬼の迷すに非ずして、心自ら迷ふのみ。人の色を好むが如きは、即ち是れ色鬼の迷はすなり。貨を好むは、即ち是れ貨鬼の迷はすなり。当に怒るべからざる所を怒るるは、是れ怒鬼の迷はすなり。当に懼るべからず所を懼るるは、是れ懼鬼の迷はすなり」と。

13 『顔氏家訓』巻三・勉学第八　南北朝～隋・顔之推

夫明六経之指、渉百家之書、縦不能増益徳業、敦厚風俗、猶為一芸得以自資。父兄不可常依、郷国不可常保。一旦流離、無人庇廕。当自求諸身耳。諺曰、積財千万、不如薄伎在身。伎之易習而可貴者、無過読書也。世人不問愚智、皆欲識人之多、見事之広、而不肯読書。是猶求飽而懶営饌、欲暖而惰裁衣也。

○顔氏家訓＝南北朝末期を代表する学者顔之推が著した家訓2巻20編。家庭生活から風俗、学問など多岐にわたり後世家訓の祖と仰がれる。書で有名な顔真卿は顔之推の子孫。○六経＝春秋・礼記・易経・詩経・書経・周礼。○百家の書＝儒家・道家・墨家・名家・法家などの学派が著した書物。○指＝旨、趣意。○敦厚＝まじめで親切。○庇廕＝かばい助けてくれる。○愚智＝愚者と知者。○懶る＝怠ける。○饌＝食事。

夫れ六経の指を明らかにし、百家の書に渉れば、縦ひ徳業を増益し風俗を敦厚するに能はざるも、猶ほ一芸を為めて以て自から資くるを得。父兄も常には依るべからず、郷国も常には保つべからず。一旦流離すれば、人の庇廕無し。当に自ら諸れを身に求むべきのみ。諺に曰はく、財を積むこと千万なるも、薄伎の身に在るに如かず。伎の習ひ易くして貴ぶべき者は、書を読むに過ぎたるは無し。世人愚智を問はず、皆人の多きを識り、事の広きを見んと欲するも、肯て書を読まず。是れ猶ほ飽を求めて饌を営むを懶り、暖を欲して衣を裁つを惰るがごとし。

14 『戦国策』巻二十三・魏二　前漢・劉向

龐葱与太子質於邯鄲。謂魏王曰、今一人言市有虎、王信之乎。王曰、否。二人言市有虎、王信之乎。王曰、寡人疑之矣。三人言市有虎、王信之乎。王曰、寡人信之矣。龐葱曰、夫市之無虎明矣。然而三人言而成虎。今邯鄲去大梁也、遠於市。而議臣者、過於三人矣。願王察之矣。王曰、寡人自為知。於是辞行。而讒言先至。後太子罷質、果不得見。

○龐葱＝魏の家臣。○太子＝魏の太子。○質＝人質。○大梁＝地名。○讒臣＝私（臣）のことをあげつらう。○讒言＝告げ口、中傷。

龐葱太子と邯鄲に質たらんとす。魏王に謂ひて曰はく、「今一人市に虎有りと言はば、王之を信ずるか」と。王曰はく、「否」と。二人市に虎有りと言はば、王之を信ずるか」と。王曰はく、「寡人之を疑はん」と。「三人市に虎有りと言はば、王之を信ずるか」と。王曰はく、「寡人之を信ぜん」と。龐葱曰はく、「夫れ市の虎無きこと明らかなり。然し而して三人言ひて虎を成す。今邯鄲の大梁を去るや、市よりも遠し。而も臣を議する者は、三人に過ぎん。願はくは王之を察せよ」と。王曰はく、寡人自ら知るを為さん」と。是に於て辞して行く。而して讒言先づ至る。後太子質を罷むるに、果して見ゆるを得ず。

15 『宋名臣言行録』王旦の条　南宋・朱熹

王大尉薦萊公為相。萊公数々短大尉於上前、而大尉専談其長。上一日謂大尉曰、「卿雖称其美、彼専談卿悪。」大尉曰、「理固当然。臣在相位久、政事闕失必多。準対陛下無所隠、益々見其忠直。此臣所以重準也。」上由是益々賢大尉。初萊公在藩鎮、嘗因生日造山棚大宴、又服用僭侈為人所奏。上怒甚、謂大尉曰、「寇準毎事欲倣朕、可乎。」大尉徐対曰、「準誠賢能、無如騃何。」上意遽解曰、「然。此止是騃耳。」遂不問。

○宋名臣言行録＝朱熹編纂。北宋百五十年における宰相以下九十七人の名臣たちの言動を集録したもの。帝王学の教本として、またあるべき臣下の手本として日本でもよく読まれた。○王大尉＝王旦。北宋の第三代皇帝真宗の家臣。真宗の治世の半分（十二年）宰相を務める。○萊公＝寇準。剛直な性格で知られた。○山棚＝祝祭日や宴会の時に特設する飾り舞台。○騃＝幼稚、やんちゃ。

王大尉萊公を薦めて相と為す。萊公数々大尉を上の前に短るも、大尉は専ら其の長を談る。上一日大尉に謂ひて曰はく、「卿其の美を称すと雖ども、彼は専ら卿の悪を談る」と。大尉曰はく、「理固より当に然るべし。臣相の位に在ること久しく、政事の闕失必ず多からん。準陛下に対し隠す所無く、益々其の忠直なるを見る。此れ臣の準を重んずる所以なり」と。上是に由りて益々大尉を賢とす。初め萊公藩鎮に在りしとき、嘗て生日に因りて山棚を造りて大いに宴し、又服用僭侈にして人の奏する所と為る。上怒ること甚だしく、大尉に謂ひて曰はく、「寇準事毎に朕に倣はんと欲す、可ならんや」と。大尉徐むろに対へて曰はく、「準は誠に賢能なるも、騃を如何とするも無し」と。上の意遽かに解けて曰はく、「然り。此れは止だ是れ騃なるのみ」と。遂に問はず。

16 『新序』巻一・雑事第一　前漢末・劉向

晋平公浮西河、中流而嘆曰、嗟乎安得賢士与共此楽者。船人固桑進対曰、君言過矣。夫剣産呉越珠産江漢、玉産昆山。此三宝者、皆無足而至。今君苟好士、則賢士至矣。平公曰、固桑来。吾門下食客者、三千余人。朝食不足、暮収市租、暮食不足、朝収市租。吾尚可謂不好士乎。固桑対曰、今夫鴻鵠高飛冲天。然其所恃者六翮耳。夫腹下之毳、背上之毛、増去一把、飛不為高下。不知君之食客六翮邪、将腹背之毳也。平公默然而不応焉。

○新序＝前漢の劉向による故事・説話を集めた書物。○平公＝春秋時代の晋の君主。幼くして君主となったが、羊舌肸（叔向）などの賢臣の補佐を得て晋の覇権を維持し大過なくこの世を去った。○固桑＝船頭の名。○六翮＝六枚の強い羽根。（諺：「**鴻鵠一挙千里、恃む所は六翮のみ**」←君主の国政を補佐するのは数名の賢人だけで十分で多くの凡人は役に立たないという意。）

晋の平公西河に浮び、中流にして嘆じて曰はく、「嗟乎安んぞ賢士の与に此の楽しみを共にする者を得ん」と。船人固桑進みて対へて曰はく、「君の言過てり。夫れ剣は呉越に産し、珠は江漢に産し、玉は昆山に産す。此の三宝は、皆足無くして至る。今君苟しくも士を好まば、則ち賢士至らん」と。平公曰はく、「固桑来れ。吾が門下の食客は、三千余人。朝食足らざれば、暮に市租を収め、暮食足らざれば、朝に市租を収む。吾尚ほ士を好まずと謂ふべけんや」と。固桑対へて曰はく、「今夫れ鴻鵠高く飛びて天に沖る。然れども其の恃む所は六翮のみ。夫れ腹下の毳、背上の毛は、一把を増去するも、飛ぶこと高下を為さず。知らず君の食客は六翮なるか、将た腹背の毳なるか」と。平公默然として応へず。

17 『晋書』巻五十八・周処伝　唐・房玄齢・李延寿（編）

周処少弧。未弱冠膂力絶人、好馳騁田猟。不修細行、縦情肆欲。州曲患之、処自知為人所悪。乃慨然有改励之志、謂父老曰、今時和歳豊、何苦而不楽耶。父老嘆曰、三害未除、何楽之有。処曰、何謂也。答曰、南山白額猛獣、長橋下蛟、併子為三矣。処曰、若此為患、吾能除之。父老曰、子若除之、則一群之大慶。非徒去害而已。処乃入山射殺猛獣、因投水搏蛟。蛟或沈或浮、行数十里、而処与之俱経三日三夜。人謂死皆相慶賀、処果殺蛟而反。聞郷里相慶、始知人患己之甚。

○晋書＝晋朝（西晋・東晋）について書かれた歴史書で二十四史の一つ。○周処＝三国時代から西晋の勇猛果敢な武将。若い頃は乱暴者でよく狼藉を働き郷里の人々に恐れられていた。改心して陸雲の下で勉励し、西晋に仕えてこの時代の名将・名臣となる。○弱冠＝男子二十歳。而立：三十歳。不惑：四十歳。知命：五十歳・耳順：六十歳。古希：七十歳。○州曲＝村里（の人々）。

周処少くして弧なり。未だ弱冠ならずして膂力人に絶し、好んで馳騁田猟す。細行を修めず、情を縦にし欲を肆にす。州曲之を患へ、処も自ら人の悪む所と為るを知る。乃ち慨然として改励の志有り、父老に謂ひて曰はく、「今時和ぎ歳豊なるに、何ぞ苦しんで楽しまざるか」と。父老嘆じて曰はく、「三害未だ除かれず、何の楽しみか之れ有らん」と。処曰はく、「何の謂ぞや」と。答へて曰はく、「南山の白額の猛獣、長橋下の蛟、子と併せて三と為す」と。処曰はく、「此の患と為すが若き、吾能く之を除かん」と。父老曰はく、「子若し之を除かば、則ち一群の大慶なり。徒に害を去るのみに非ず」と。処乃ち山に入りて猛獣を射殺し、因りて水に投じて蛟を搏つ。蛟或ひは沈み或ひは浮き9、行くこと数十里、而して処之と倶に経ること三日三夜。人死せりと謂ひて皆相慶賀するも、処果して蛟を殺して反る。郷里の相慶するを聞き、始めて人の己を患ふるの甚だしきを知る。

18 『南雷文案』巻六・「王征南墓誌名」　明末清初・黄宗羲

少林以拳勇名天下。然主於搏人、人亦得以乗之。有所謂内家者、以静制動、犯者応手即仆。故別少林為外家。

王征南為人機警、得伝之後、絶不露圭角、非遇甚困則不発。嘗夜出偵事、為守兵所獲、反接廊柱。数十人轟飲守之。征南拾砕磁、偸割其縛、探懐中銀、望空而擲。数十人方争攫、征南遂逸出。

予嘗与之入天童。僧山談有膂力、四五人不能掣。其手稍近征南則、闕然負痛。征南曰、「今人以内家無可眩曜、於是以外家攙入之。此学行丶当衰矣。」因許敘其源流。

〇王征南＝清の拳法家。太極拳を含めた内家拳の達人。〇黄宗羲＝明末清初の儒学者。号は「南雷」。〇機警＝機知があって賢いさま。〇圭角＝かどかどしいこと。〇天童＝天童山。禅宗道場として名僧が集まった。栄西や道元もここで修行。中国浙江省東部にある太白山中の一峰。〇眩曜＝光り輝く。人目を引く。〇攙入＝誤って紛れ込むこと。

少林は拳勇を以て天下に名あり。然れども人を搏つを主とすれば、人も亦た以て之に乗ずるを得。所謂内家なる者有り、静を以て動を制し、犯す者は手に応じて即ち仆る。故に少林と別ちて外家と為す。

王征南人と為り機警なるも、伝を得たるの後は、絶へて圭角を露はさず、甚だしき困しみに遇ふに非ざれば則ち発せず。嘗て夜出でて事を偵し、守兵の獲る所と為り、廊柱に反接せらる。数十人轟飲して之を守る。征南砕磁を拾ひて、偸に其の縛を割き、懐中の銀を探り、空を望んで擲つ。数十人方に争ひ攫り、征南遂に逸れ出づ。

予嘗て之と天童に入る。僧山談膂力有り、四五人にても掣する能はず。其の手稍征南に近づけば則ち、闕然として痛みを負ふ。征南曰はく、「今人内家の眩曜すべきもの無きを以て、是に於て外家を以て之に攙入す。此の学行丶当に衰ふべし」と。因りて其の源流を敘するを許せり。

19 『童子問』巻之下　江戸前期・伊藤仁斎

問読書以何為要。曰、識見為要。読書無識見、猶不読也。苟要得識見、当尋其所帰宿。勿徒渉猟。須如在外者之求帰家。不可如迷子之行道路。迷子之在途也、不識東西、不分南北、従面信脚、行行不已、茫然而立、偃然而憩、卒不知其家之在何処。今之読書者。不弁有用無用、欲貧多闘靡、至辟書奇編秘記奥牒、索捜無遺。雖有数十巻著作、豈足称読書乎。今之読書者、奚以異迷子之行道路也。

○童子問＝江戸時代前期の儒学者伊藤仁斎が著した問答形式の儒教の概説書。○偃然＝寝そべるさま。

問ふ、「書を読むには何を以て要と為すか」と。曰はく、「識見を要と為す。書を読みて識見無きは、猶ほ読まざるがごときなり。苟しくも識見を得んと要せば、当に其の帰宿する所を尋ぬべし。徒らに渉猟すること勿れ。須らく外に在る者の家に帰るを求むるが如くすべし。迷子の道路を行くが如くすべからず。迷子の途に在るや、東西を識らず、南北を分たず、面に従ひ脚に信せ、行き行きて已まず、茫然として立ち、偃然として憩ひ、卒に其の家の何れの処に在るかを知らず。今の書を読む者。有用無用を弁ぜず、多を貧り靡を闘はし、僻書奇編秘記奥牒に至るまで、索捜して遺すこと無からんと欲す。数十巻の著作有りと雖も、豈に書を読むと称するに足らんや。今の書を読む者、奚を以てか迷子の道路を行くに異ならんや。

20 『韓非子』外儲説左第三十二　戦国時代・韓非

燕王好微巧。衛人曰、臣能以棘刺之端為母猴。燕王説之、養之以五乗奉。王曰、吾試観客為棘刺之母猴。客曰、人主欲観之、必半歳不入宮、不飲酒食肉、雨霽日出、視之晏陰之間、而棘刺之母猴乃可見也。燕王因養衛人、不能観其母猴。鄭有台下之冶者、謂燕王曰、臣為削者也。諸々微物必以削削之。而所削必大於削。今棘刺之端、不容削鋒。王試観客之削。能与不能可知也。王曰、善。謂衛人曰、客為棘刺之母猴、何以。曰、以削。王曰、吾欲観之。客曰、臣請之舎取之。因逃。

○棘刺＝いばらのとげ。○五乗奉＝五乗の俸禄。○削＝ノミ。○晏陰之間＝日向と日陰の境目。

燕王微巧を好む。衛人曰はく、「臣能く棘刺の端を以て母猴を為る」と。燕王之を説び、之を養ふに五乗の奉を以てす。王曰はく、「吾試みに客の棘刺の母猴を為るを観ん」と。客曰はく、「人主之を観んと欲せば、必ず半歳宮に入らず、飲酒食肉せず、雨霽れ日出づるとき、之を晏陰の間に視て、棘刺の母猴乃ち見るべきなり。燕王因りて衛人を養ふも、其の母猴を観る能はず。鄭に台下の冶者有り、燕王に謂ひて曰はく、「臣は削を為す者なり。諸々の微物は必ず削を以て之を削る。而して削る所必らず削より大なり。今棘刺の端は、削鋒を容れず。王試みに客の削を観よ。能くすると能くせざると知るべきなり」と。王曰はく、「善し」と。衛人に謂ひて曰はく、「客棘刺の母猴を為るに、何を以てする」と。曰はく、「削を以てす」と。王曰はく、「吾之を観んと欲す」と。客曰はく、「臣請ふ舎に之きて之を取らん」と。因りて逃る。

実戦編

1 『史記』管晏列伝第二　前漢・司馬遷

晏子為斉相出。其御之妻、従門間而窺其夫。其夫為相御、擁大蓋、策駟馬、意気揚揚、甚自得也。既而帰。其妻請去。夫問其故。妻曰、「晏子長不満六尺、身相斉国、名顕諸侯。今者、妾観其出、志念深矣。常有以自下者。今、子長八尺、乃為人僕御。然子之意自以為足。妾是以求去也」其後、夫自抑損。晏子怪而問之。御以実対。晏子薦以為大夫。

○晏子＝晏嬰。春秋時代の斉の名宰相。○自下＝謙虚。○僕御＝下男。○抑損＝控え目にする。○大夫＝官吏。

晏子斉の相たりしとき出づ。其の御の妻、門間従りして其の夫を窺ふ。其の夫相の御と為りて、大蓋を擁し、駟馬に策ち、意気揚揚として、甚だ自得せり。既にして帰る。其の妻去らんことを請ふ。夫其の故を問ふ。妻曰はく、「晏子は長六尺に満たざるに、身は斉国の相たり、名は諸侯に顕はる。今者、妾其の出づるを観るに、志念深し。常に以て自ら下る者有り。今、子は長八尺なるに、乃ち人の僕御たり。然るに子の意自ら以て足れりと為す。妾是を以て去らんことを求むるなり」と。其の後、夫自ら抑損す。晏子怪しみて之を問ふ。御実を以て対ふ。晏子薦めて以て大夫と為せり。

2 『荘子』譲王第二十八　戦国時代・荘子

子列子窮、容貌有飢色。客有言之於鄭子陽者。曰、列禦寇蓋有道之士也。居君之国而窮。君無乃為不好士乎。鄭子陽即令官遺之粟。子列子見使者、再拝而辞。使者去、子列子入。其妻望之而拊心曰、妾聞為有道者之妻子皆得佚楽。今有飢色。君過而遺先生食。先生不受。豈不命邪。子列子笑謂之曰、君非自知我也。以人之言而遺我粟。至其罪我也、又且以人之言。此吾所以不受也。（『荘子』）

○列子＝列禦寇。荘子に先立つ中国戦国時代の道家の思想家。諸子百家の一人。○鄭子陽＝鄭の国（西周時代から春秋戦国時代まで約四百年余りにわたって存在した）の宰相。

子列子窮し、容貌飢色有り。客之を鄭の子陽に言ふ者有り。曰はく、「列禦寇は蓋し有道の士なり。君の国に居りて窮す。君乃ち士を好まずと為す無からんや」と。鄭の子陽即ち官をして之に粟を遺らしむ。子列子使者を見、再拝して辞す。使者去り、子列子入る。其の妻之を望みて心を拊ちて曰はく、「妾聞く有道者の妻子と為れば皆佚楽を得。今飢色有り。君過てりとして先生に食を遺る。先生受けず。豈に命ならずや」と。子列子笑ひて之に謂ひて曰はく、「君自ら我を知るに非ざるなり。人の言を以てして我に粟を遺る。其の我を罪するに至るや、又且に人の言を以てせんとす。此吾の受けざる所以なり」と。（『荘子』）

3 『呂子春秋』巻十五　秦・呂不韋

昔者晋献公使荀息仮道於虞以伐虢。荀息曰、「請以垂棘之璧与屈産之乗、以賂虞公、而求仮道焉。必可得也。」献公曰、「夫垂棘之璧、吾先君之宝也。屈産之乗、寡人之駿也。若受吾幣而不吾仮道、将奈何。」荀息曰、「不然。彼若不吾仮道、必不吾受也。若受我而仮我道、是猶取之内府而蔵之外府也、猶取之内阜而著之外阜也。君奚患焉。」献公許之。（『呂氏春秋』権勲篇）

昔者晋の献公荀息をして道を虞に仮りて以て虢を伐たしめんとす。荀息曰はく、「請ふ垂棘の璧と屈産の乗とを以て、以て虞公に賂して、道を仮らんことを求めん。必ず得べきなり」と。献公曰はく、「夫れ垂棘の璧は、吾が先君の宝なり。屈産の乗は、寡人の駿なり。若し吾が幣を受けて吾に道を仮さずんば、将に奈何とせんとする」と。荀息曰はく、「然らず。彼若し吾に道を仮さずんば、必ず吾に受けざるなり。若し我に受けて我に道を仮さば、是れ猶ほ之を内府に取りて之を外府に蔵するがごときなり、猶ほ之を内阜に取りて而之を外阜に著るがごときなり。君奚ぞ患へん」と。献公之を許す。（『呂氏春秋』権勲篇）

4 『韓非子』五蠹第四十九　戦国時代・韓非

古昔丈夫不耕、草木之實足食也。婦人不織、禽獸之皮足衣也。不事力而養足、人民少而財有餘。故民不争。是以厚賞不行、重罰不用、而民自治。今人有五子不為多。子又有五子、大父未死而有二十五孫。是以人民衆而貨財寡、事力勞而供養薄。故民争。雖倍賞累罰、而不免於亂。

古昔丈夫耕さざるは、草木の實食らふに足ればなり。婦人織らざるは、禽獸の皮衣るに足ればなり。力を事とせずして養足り、人民少くして財餘り有り。故に民争はず。是を以て厚賞行はず、重罰を用ひず、而も民自ら治まる。今人五子有るも多しと為さず。子又五子有らば、大父未だ死せずして二十五孫有り。是を以て人民衆くして貨財寡なく、力を事とすること勞して供養薄し。故に民争ふ。賞を倍し罰を累ぬと雖も、而れども亂を免れず。

5 『二老堂詩話』の一条　宋・周必大

余少時、嘗夢至人家。其書室為叢竹所蔽、殊不開爽。堂下皆古柳、鴉噪不止。夢中作詩云、「竹多翻障月　木老只啼烏。」　意謂、竹本清虚、延貯風月、今反窒塞如此。種木不棲鸞鳳、徒能集烏以聒耳。似譏其主人也。後数年、為金陵教官。初入廨舎、則庁下及門外、古柳参天、鴉鳴竟日。庁傍小書室、叢竹蔽虧、恍如所夢。

○周必大＝南宋の政治家・文学者。詩文に優れ随筆にも多くの作を残す。○延貯＝佇んで待ち望む。○鸞鳳＝鸞鳥と鳳凰。想像上のめでたい神鳥。○金陵＝南宋の重要都市。○蔽虧＝覆い隠す。○恍＝ぼんやり。

余少き時、嘗て夢みて人家に至る。其の書室は叢竹の蔽ふ所と為り、殊に開爽ならず。堂下は皆古柳にして、鴉噪ぎを止めず。夢の中に詩を作りて云はく、「竹多くして翻って月を障り　木老いて只烏啼く」と。意謂ふに、竹は本清虚にして、風月に延貯するに、今反って窒塞すること此くの如し。木を種るも鸞鳳棲まずして、徒だ能く烏を集めて以て聒しきのみと。其の主人を譏るに似たり。後数年、金陵の教官と為る。初めて廨舎に入るに、則ち庁下及び門外、古柳天に参り、鴉鳴くこと竟日なり。庁傍の小書室、叢竹蔽虧し、恍として夢みる所の如し。

6 『世説新語』政事大三／『呂子春秋』巻二十四

A　王安期作東海郡、吏録一犯夜人来。王問、何処来。云、従師家受書還、不覚日晩。王曰、鞭撻寧越以立威名、恐非致理之本。使吏送令帰家。

○寧越＝貧しい農民の出であるが十五年間寝る間も惜しんで勉励し周の威公の師となる。

A　王安期東海の郡作りしとき、吏一の夜を犯せし人を録し来たる。王問ふ、「何処より来たるか」と。云ふ、「師の家より書を受けて還り、日の晩るるを覚へず」と。王曰はく、「寧越を鞭撻して以て威名を立つるは、恐らくは理を致すの本に非ざらん」と。吏をして送らしめ家に帰らしむ。

B　呂子春秋曰、寧越者、中牟鄙人也。苦耕稼之労、謂其友曰、何為可以免此苦也。其友曰、「莫如学也。学三十歳、則可以達矣。寧越曰、請以十五歳。人将休、吾不敢休。人将臥、吾不敢臥。学十五歳而為周威公之師也。

B　呂子春秋に曰ふ、「寧越は、中牟の鄙人なり。耕稼の労に苦しみ、其の友に謂ひて曰はく、「何為れば以て此の苦を免かるべき」と。其の友曰はく、「学ぶに如くは莫し。学ぶこと三十歳にして、則ち以て達すべし」と。寧越曰はく、「請ふ十五歳を以てせん。人将に休まんとするも、吾敢て休まん。人将に臥せんとするも、吾敢て臥せず。学ぶこと十五歳にして周の威公の師と為る。

7 『本事詩』情感第一「人面桃花」　宋・孟棨

博陵崔護、姿質甚美、而孤潔寡合。拳進士、下第。清明日、独遊都城南、得居人荘。一畝之宮、而花木叢萃、寂若無人。叩門久之。有女子、自門隙窺之、問曰、「誰耶。」以姓字対曰、「尋春独行、酒渇求飲。」女入以杯水至、開門設牀命坐、独倚小桃斜柯佇立、而意属殊厚。妖姿媚態、綽有余妍。崔以言桃之、不対。目注者久之。崔辞去、送至門、如不勝情而入。崔亦睠盻而帰。嗣後、絶不復至。及来歳清明日、忽思之、情不可抑。逕往尋之。門牆如故、而已鎖扃之。因題詩於左扉曰、

去年今日此門中　人面桃花相映紅
人面不知何処去　桃花依旧笑春風

○本事詩＝主に唐詩人の有名な詩を引き、それにまつわる物語を記した逸話伝奇集。○人面桃花＝中唐の詩人崔護の詩の一句から出た言葉で、崔護の青年時代の恋愛物語の一幕が『人面桃花』として開花し伝奇化したものといわれる。○博陵＝地名。○崔護＝中唐の詩人。何度も科挙試験に落第したが後に徳宗の貞元十二年（796）に進士に及第し、後に梧州の役人となる。○清明＝清明節。日本のお彼岸にあたる。○意属＝心を寄せる。○睠盻＝振り返る。○嗣後＝その後。以後。○鎖扃＝鍵をかけて門を閉ざす。

※**後日譚**：娘に逢えなかった崔護は、数日後近くまで出かける用事があり再びその家を尋ねた。すると年老いた娘の父親がでてきて崔護に詰った「外出先から戻った娘は扉に書かれてあった詩を読んだ後、急に病になり何も喉を通らず数日後にそのまま死んだ。娘は貴殿のせいで死んだのだ」。崔護は嘆き悲しみ、今もなお生きているかのような娘の亡骸を抱いて号泣した。そして祈りながら呼びかけると間もなく娘は目を開き、生き返った。父親は大いに喜び一人娘を崔護に嫁がせた。

博陵の崔護、姿質甚だ美なるも、孤潔にして合ふこと寡し。進士に挙げられ、下第す。清明の日、独り都城の南に遊び、居人の荘を得たり。一畝の宮にして、花木叢萃し、寂として人無きが若し。門を叩くこと之を久しうす。女子有り、門隙より之を窺ひ、問ひて曰はく、「誰ぞや」と。姓字を以て対へて曰はく、「春を尋ねて独り行き、酒渇して飲を求む」と。女入り杯水を以て至り、門を開き牀を設けて坐を命じ、独り小桃の斜柯に倚りて佇立して、意属殊に厚し。妖姿媚態、綽として余妍有り。崔言を以て之に挑むも、対へず。目注すること之を久しうす。崔辞去するに、送りて門に至り、情に勝へざるが如くにして入る。崔も亦た睠盻して帰る。嗣後、絶えて復た至らず。来歳の清明の日に及び、忽ち之を思ひ、情抑ふべからず。逕ちに往きて之を尋ぬ。門牆故の如くなるも、已に之を鎖扃せり。因りて詩を左扉に題して曰はく、

去年の今日此の門の中　人面桃花相映じて紅なる
人面何れの処にか去るを知らず　桃花旧に依りて春風に笑む

8 『欧陽文忠公集』巻十七所収「朋黨論」　北宋・欧陽修

臣聞、朋黨之説自古有之、惟幸人君辨其君子小人而已。大凡君子與君子以同道為朋、小人與小人以同利爲朋、此自然之理。然臣謂、小人無朋、惟君子則有之。其故何哉。小人所好者禄利也、所貧者財貨也。當其同利之時、暫相黨引以為朋者偽也。及其見利而爭先、或利盡而交疎、則反相賊害。雖其兄弟親戚不能相保。故臣謂、小人無朋、其暫爲朋者偽也。君子則不然、所守者道義、所行者忠信、所惜者名節。以之修身、則同道而相益、以之事國、則同心而共濟、終始如一。此君子之朋也。故爲人君者、但當退小人之偽朋、用君子之眞朋。則天下治矣。

○朋黨＝主義や利害を共通にする仲間。徒党。○朋黨之説＝朋党を是あるいは否とする意見。○黨引＝結託して徒党を組む。○賊害＝殺傷したり害を与えること。

臣聞く、朋黨の説は古より之有り、惟人君の其の君子と小人とを辨ずるを幸ふのみ。大凡君子と君子とは道を同じうするを以て朋と為り、小人と小人とは利を同じうするを以て朋と為る、此れ自然の理なり。然れども臣謂へらく、小人は朋無し、惟君子は則ち之有り。其の故は何ぞや。小人の好む所の者は禄利なり、貧る所の者は財貨なり。其の利を同じうするの時に當りて、暫く相黨引して以って朋と為る者は偽りなり。其の利を見て先を爭ひ、或ひは利盡きて交り疎なるに及びては、則ち反つて相賊害す。其の兄弟親戚と雖も相保つこと能はず。故に臣謂へらく、小人は朋無し、其の暫く朋と爲る者は偽なり。君子は則ち然らず、守る所の者は道義、行ふ所の者は忠信、惜しむ所の者は名節なり。之を以て身を修むれば、則ち道を同じうして相益し、之を以て國に事ふれば、則ち心を同じうして共に濟し、終始一の如し。此れ君子の朋なり。故に人君爲る者は、但だ當に小人の偽朋を退け、君子の眞朋を用ふべし。則ち天下治むる。

9 『資治通鑑』周紀・論賛の部分　北宋・司馬光

夫才與德異、而世俗莫之能辨、通謂之賢。此其所以失人也。夫聰察強毅之謂才、正直中和之謂德。才者德之資也。德者才之帥也。雲夢之竹、天下之勁也。然而不矯揉、不羽括、則不能以入堅。棠谿之金、天下之利也。然而不鎔範、不砥礪、則不能以擊強。

是故才德全盡、謂之聖人、才德兼亡、謂之愚人。德勝才、謂之君子、才勝德、謂之小人。凡取人之術、苟不得聖人君子而與之、與其得小人、不若得愚人。何則君子挾才以為善、小人挾才以為悪。挾才以為善者、善無不至、挾才以爲悪者、悪亦無不至矣。愚人雖欲爲不善、智不能周、力不可勝。譬如乳狗搏人。人得而制之。小人智足以遂其姦、勇足以決其暴。是虎而翼者也。其爲害豈不多哉。

○司馬光＝北宋時代の政治家・儒学者・歴史家で十九歳で進士に合格したエリート官僚である。○雲夢＝湖北省・竹の名産地。○勁＝堅強。○矯揉＝真っすぐなのを曲げて形を整える。○羽括＝矢はずや矢羽根を取り付ける。○鎔範＝鋳型に溶かす。○砥礪＝砥石で研ぐ。

夫れ才は徳と異なるに、世俗之を能く辨ずる莫く、通じて之を賢と謂ふ。此れ其の人を失ふ所以なり。夫れ聰察強毅を之れ才と謂い、正直中和を之れ徳と謂ふ。才は徳の資なり。徳は才の帥なり。雲夢の竹は、天下の勁なり。然り而して矯揉せず、羽括せず、則ち以て堅きに入る能ず。棠谿の金は、天下の利なり。然れども鎔範せず、砥礪せずんば、則ち以て強きを撃つ能はず。

是の故に才徳全く盡くせる、之を聖人と謂ひ、才徳兼ね亡へる、之を愚人と謂ふ。徳の才に勝る、之を君子と謂ひ、才の徳に勝る、之を小人と謂ふ。凡そ人を取るの術は、苟しくも聖人君子を得て之と與にせずんば、其の小人を得んよりは、愚人を得るに若かず。何となれば則ち君子は才を挾みて以て善を為し、小人は才を挾みて以て悪を為す。才を挾みて以て善を為す者は、善至らざる無く、才を挾みて以て悪を爲す者は、悪も亦た至らざる無し。愚人は不善を為さんと欲すと雖も、智周き能はず、力勝ふべからず。譬へば乳狗の人を搏つが如し。人得て之を制す。小人は智以て其の姦を遂ぐるに足り、勇以て其の暴を決するに足る。是れ虎にして翼ある者なり。其の害を爲すこと豈に多からざらんや。

10 『焚書』巻一　明末・李贄

人猶水也、豪傑猶巨魚也。欲求巨魚、必須異水、欲求豪傑、必須異人。此的然之理也。今夫井非不清潔也、味非不甘美也、日用飲食非不切切於人、若不可缺以旦夕也。然持任公之鉤者、則未嘗之井矣、何也。以井不生魚也。欲求三寸之魚、亦了不可得矣。今若索豪士於鄉人皆好之中、是猶釣魚於井也。胡可得也。豪傑之士決非鄉人之所好、而鄉人之中、亦決不生豪傑。古今賢聖皆豪傑爲之、非豪傑而能爲聖賢者、自古無之矣。後天的世俗的なものにいっさい汚染されていない

○焚書＝李贄の書簡・随筆・詩篇を集めたもの。○李贄＝李卓吾。明の陽明学左派の思想家。人間の思想、行動の根本は後天的世俗的なものに一切汚染されていない各自の自然心にあるという「童心説」を唱える。経書や儒教の権威を痛烈に批判し、異端の思想家として投獄され獄中で自殺した（73 歳）。焚書は 65 歳の頃の著作。○異水＝大海のような特別な水。○異人＝特別な人。○豪傑＝才知の特に優れた人物。

人は猶ほ水のごときなり、豪傑は猶ほ巨魚のごときなり。巨魚を求めんと欲すれば、必ず異水を須ち、豪傑を求めんと欲すれば、必ず異人を須つ。此れ的然の理なり。今夫れ井清潔ならざるに非ず、味甘美ならざるに非ず、日用飲食人に切切たらざるに非ざること、欠くに旦夕を以てすべからざるが若きなり。然れども任公の鉤を持つもの、則ち未だ嘗て井に之かざるは何ぞや。井の魚を生ぜざるを以てなり。三寸の魚を求めんと欲すれども、亦た了に得べからず。今若し豪士を鄉人皆好むの中に索むれば、是れ猶ほ井に魚を釣るがごときなり。胡ぞ得べけんや。豪傑の士は決して鄉人の好む所に非ず、鄉人の中、亦た決して豪傑を生ぜず。古今の賢聖皆豪傑之と為る、豪傑に非ずして能く聖賢為る者は、古より之無し。

11 『宋名臣言行録』李沆の条　南宋・朱熹

李丞相沆、自奉甚薄所居陋巷、廳事無重門。至於垣頽壁損、沆不以介意。堂前薬欄壊。妻戒守舎者勿葺、以試沆。沆朝夕見之、経月終不言。妻以語沆。沆曰、豈可以此動吾一念哉。家人勧治居第、未賞答。弟維因語次及之。沆曰、身食厚禄、時有横賜。計嚢装、亦可以治第。但念内典、以此世界爲欿陷。安得圓満如意、自求稱足。今市新宅、須一年繕完。人生朝暮不可保、又豈能久居。巣林一枝、聊自足耳。安事豐屋哉。

〇李沆＝北宋の名宰相の一人で真宗皇帝の教育役でもあった。道徳性と知恵に優れたことから後世からは「聖相」（知徳の優れた宰相）と呼ばれている。〇居第＝住宅。〇語次＝話のついで。

李丞相沆、自ら奉ずること甚だ薄く居る所は陋巷にして、庁事に重門無し。垣頽れ壁損なふに至るも、沆以て意に介せず。堂前の薬欄壊る。妻舎を守る者を戒めて葺ふこと勿らしめて、以て沆を試みる。沆朝夕之を見、月を経るも終に言はず。妻以て沆に語ぐ。沆曰はく、「豈に此を以って吾が一念を動かすべけんや」と。家人居第を治めんことを勧むるも、未だ嘗て答へず。弟維語次に因りて之に及ぶ。沆曰はく、「身厚禄を食み、時に横賜有り。嚢装を計るに、亦た以て第を治むべし。但だ内典を念ずるに、此の世界を以て欠陥と爲す。安んぞ圓満なること意の如しとして、自ら稱足を求むるを得んや。今新宅を市へば、一年の繕完を須ゐん。人生は朝暮をも保つべからず、又豈に能く久しく居らんや。林に巣くふこと一枝、聊か自ら足れりとするのみ。安くんぞ豐屋を事とせんや」と。

12 『容斎続筆』の一条　南宋・洪邁（号は容斎）

白楽天栽松詩云、

小松未盈尺　心愛手自移
蒼然澗底色　雲湿煙霏霏
栽植我年晩　長成君性遅
如何過四十　種此数寸枝
得見成陰否　人生七十稀

予治圃於郷里、乾道己丑歳、正年四十七矣。自伯兄山居手移稚松数十本、其高僅四五寸、植之雲壑石上、擁土以爲固、不能保其必活也。過二十年、蔚然成林、皆有干霄之勢。偶閲白公集、感而書之。

〇容斎随筆＝南宋・洪邁撰の随筆集。〈随筆〉、〈続筆〉から〈五筆〉まで五集七十四巻。歴史、文学、哲学、芸術など多方面にわたる。〇洪邁＝南宋の政治家・儒学者。〇蔚然＝覆い茂るさま。〇干霄之勢＝空に向かって勢いよく伸びる。

白楽天の栽松の詩に云ふ、

「小松未だ尺に盈たず　心に愛でて手づから自ら移す
蒼然たり澗底の色　雲湿ひて煙霏霏たり
栽植我が年晩れ　長成君が性遅し
如何ぞ四十を過ぎて　此の数寸の枝を種うる
陰を成すを見るを得るや否や　人生七十稀なり」と。

予の圃を郷里に治むるは、乾道己丑の歳、正に年四十七なり。伯兄の山居より手ずから稚松数十本、其の高さ僅かに四五寸なるを移し、之を雲壑の石上に植ゑ、土を擁して以て固めと爲すも、其の必ず活くるを保ふこと能はざりき。二十年を過ぎ、蔚然として林を成し、皆霄を干すの勢ひ有り。偶白公の集を閲し、感ありて之を書す。

13 『避暑録話』の一条　北宋～南宋・葉夢得

読書而不応挙則已矣。読書而応挙、応挙而望登科、登科而仕、仕而以敘進。苟不違道与義、皆無不可也。而世有一種人、既仕而得禄、反嘐嘐然以不仕為高、若欲棄之、此豈其情也哉。有言窮書生不識饅頭。計無従得。一日見市肆有列而鬻者、輒大呼仆地。主人驚問、曰、「吾畏饅頭。」主人曰、「安有是理。」乃設饅頭百許、空室閉之、徐伺于外、寂不聞声、穴壁窺之、則以手搏撮、食者過半矣。亟開門詰其然、曰、「吾見此忽自不畏。」主人知其紿、怒而叱之曰、「若尚有畏乎。」曰、「有猶畏茶両碗爾。」此何異求不仕者耶。

書を読みて挙に応ぜざれば則ち已まん。書を読みて挙に応じ、挙に応じて登科を望み、登科して仕へ、仕へて以て敘進す。苟しくも道と義とに違はざれば、皆可ならざる無きなり。而るに世に一種の人有り、既に仕へて禄を得れば、反つて嘐嘐然として仕へざるを以て高しと為し、之を棄てんと欲するが若し、此れ豈に其の情ならんや。言へる有り窮書生饅頭を識らず。計従りて得る無し。一日市肆に列して鬻ぐ者有るを見る、輒ち大呼して地に仆ふる。主人驚き問ふに、曰はく、「吾饅頭を畏る」と。主人曰はく、「安ぞ是の理あらんや」と。乃ち饅頭百許りを設け、空室に之を閉し、徐ろに外より伺ふに、寂として声を聞かず、壁に穴して之を窺ふに、則ち手を以て搏撮し、食ふ者半ばを過ぎたり。亟かに門を開きて其の然るを詰じるに、曰はく、「吾此れを見れば忽自ち畏れず」と。主人其の紿きしを知り、怒りて之を叱して曰はく、「若尚ほ畏るる有るか」と。曰はく、「有り猶ほ茶両碗を畏るるのみ」と。此何ぞ仕へざるを求むる者に異ならんや。

14 『搜神記』巻二十　東晋・干宝

李信純、家養一狗、字曰黒竜。愛之尤甚。行坐相随、飲饌之間、皆分与食。忽一日、於城外飲酒大醉。帰家不及、臥於草中。遇〻太守鄭瑕出猟、見田草深、遣人縦火焼之。信純臥処、恰当順風。犬見火来、乃以口拽信純衣、信純亦不動。臥処、比有一渓、相去三五十歩。犬即奔往入水、湿身走来臥処、周廻以身灑之、獲免主人大難。犬運水困乏之、致斃於側。俄而信純醒来、見犬已死、遍身毛湿、甚訝其事。観火踪跡、因而慟哭。聞於太守。太守憫之曰、「犬之報恩甚於人。人不知恩、豈如犬乎。」

李信純、家に一狗を養ひ、字して黒竜と曰ふ。之を愛でること尤も甚し。行坐相随ひ、飲饌の間、皆分ちて与に食す。忽に一日、城外に於て飲酒し大醉す。家に帰るも及ばず、草中に臥す。遇〻太守鄭瑕出猟し、田の草深きを見、人をして火を縦ち之を焼かしむ。信純の臥する処、恰も順風に当る。犬火の来るを見、乃ち口を以て信純の衣を拽くも、信純亦た動かず。臥する処、比きに一渓有り、相去ること三五十歩なり。犬即ち奔り往きて水に入り、身を湿らせて走りて臥す処へ来り、周廻して身を以て之に灑ぎ、主人を大難より免れしむるを獲たり。犬水を運びて困乏し、斃を側に致す。俄にして信純醒め来り、犬の已に死し、遍身の毛の湿れるを見、甚だ其の事を訝しむ。火の踪跡を観、因りて慟哭す。太守に聞こゆ。太守之を憫みて曰はく、「犬の恩に報ゆること人よりも甚し。人の恩を知らざるもの、豈に犬に如かんや」と。

15 『珂雪斎集』巻二十一　明末・袁中道

昔有一友人、以豪爽自喜。同入西山。時初春、乃裸体跣足入玉泉山裂帛湖中。人皆詫異之、彼亦沾沾自喜。過数戴、予私問之曰、「卿往年跣足入裂帛湖、可称豪爽。」其人欣然。予再問之曰、「北方初春氷雪稜稜。入時得無小苦耶。幸無欺我。」其人曰、「甚苦。至今冷気入骨、得一脚痛病、尚未痊也。当時自為豪爽為之、不知其害若此。」然則世上豪爽事、其不為裂帛湖中濯足者寡矣。

○珂雪斎集＝明の袁中道の詩文集。袁中道は兄の宗道、宏道共に詩人として高名で世に「三袁」と称される。
○詫異＝驚いて目をみはる。○沾沾＝浮き浮きして。

昔一友人有り、豪爽を以て自ら喜ぶ。同に西山に入る。時初春なるに、乃ち裸体跣足して玉泉山の裂帛湖中に入る。人皆之を詫異し、彼も亦た沾沾として自ら喜ぶ。過ぐること数戴、予私に之に問ひて曰はく、「卿往年跣足して裂帛湖に入るは、豪爽と称すべし」と。其の人欣然たり。予再び之に問ひて曰はく、「北方の初春は氷雪稜稜たり。入りし時小苦無きを得んや。幸はくは我を欺く無かれ」と。其の人はく曰、「甚だ苦しむ。今に至りて冷気骨に入りて、一脚痛病を得、尚ほ未だ痊ざるなり。当時自ら豪爽と為ひて之を為すも、其の害此くの若くなるを知らざりき」と。然らば則ち世上豪爽の事、其の裂帛湖中に足を濯ぐこと為らざる者寡なし。

16 『潛研堂文集』巻十七「弈喩」　清朝中期・錢大昕

予観弈於友人所、一客數〻敗。嗤其失算、輒欲易置之。以爲不逮己也。頃之客請與予對局。予頗易之。甫下數子、客已得先手。局将半、予思益〻苦、而客之智尚有餘。竟局数之、客勝予十三子。予赧甚、不能出一言。後有招予観奔者、終日默坐而已。今之学者讀古人書、多訾古人之失。與今人居亦楽稱人失。人固不能無失。然試易地以處、平心而度之、吾果無一失乎。吾能知人之小失、而不能見吾之失。吾能指人之小失、而不能見吾之大失。吾求吾失且不暇、何暇論人哉。

〇錢大昕＝清の学者。幼少から神童の誉れが高く清朝考証学の代表的人物の一人とされる。『潛研堂全書』50巻は平生の著述を集成したもの。〇弈＝囲碁。●易←代わる。侮る。〇逮ぶ＝及ぶ。〇頃く＝わずかの時間。〇赧する＝赤面する。

予弈を友人の所に観るに、一客數〻敗る。其の算を失ふを嗤ひ、輒ち易りて之を置かんと欲す。以て己に逮ずと爲せばなり。之を頃して客予と對局するを請ふ。予頗る之を易る。甫めて數子を下すに、客已に先手を得。局将に半ならんとして、予思ふこと益〻苦しく、而して客の智尚ほ餘り有り。局を竟へ之を数ふるに、客予に勝つこと十三子。予赧すること甚だしく、一言を出だす能はず。後予を招きて弈を観る者有れば、終日默坐するのみ。今の学者は古人の書を讀み、多く古人の失を訾る。今人と居るに亦た楽しんで人の失を称す。人固より失無き能はず。然れども試みに地を易へて以て処り、心を平らかにして之を度れば、吾果たして一失無からんや。吾能く人の小失を知るも、而れども吾の失を見る能わず。吾能く人の小失を指すも、而れども吾の大失を見る能はず。吾吾が失を求むることすら且つ暇あらず、何ぞ人を論ずる暇あらんや。

17 『帰田録』巻一　北宋・欧陽脩（陽修）

仁宗在東宮魯公宗道爲諭德。其居在宋門外、俗謂浴堂巷。有酒肆在其側、號仁和酒、有名於京師。公往往易服微行、飲於其中。　一日眞宗急召公、将有所問。使者及門而公不在。移時、乃自仁和肆中飲歸。中使遽先入白。乃與公約曰、上若怪公來遅、當託何事以對。幸先見教。冀不異同。公曰、但以實告。中使曰、然則當得罪。公曰、飲酒、人之常情。欺君、臣子之大罪也。中使嗟歎而去。眞宗果問使者。具如公對。眞宗問曰、何故私入酒家。公謝曰、臣家貧、無器皿。酒肆百物具備、賓至如歸。適〻有郷里親客自遠來。與之飲。然臣既易服、市人亦無識臣者。眞宗笑曰、卿爲宮臣。恐爲御史所弾。然自此奇公、以爲忠實可大用。

○帰田録＝事件の断片・考証・教訓・民俗などをありのままに記されたもの。○仁宗＝北宋の第四代皇帝。父は第三代皇帝真宗。○魯宗道＝真宗に忠実で偽りを述べないことが評価された。和厚で思いやり深く、どのような人にも和顔温語で接したという。○諭徳＝皇太子の教育係。○浴堂巷＝庶民街。○酒肆＝居酒屋。○奇＝優れた。

仁宗東宮に在りしとき魯公宗道諭徳と爲る。其の居は宋門の外に在り、俗に浴堂巷と謂ふ。酒肆の其の側に在る有りて、仁和酒と号し、京師に名有り。公往往服を易へて微行して、其の中に飲む。一日眞宗急に公を召し、将に問ふ所有らんとす。使者門に及ぶも公在らず。時を移して、乃ち仁和肆中より飲みて帰る。中使遽かに先づ入りて白す。乃ち公と約して曰はく、「上若し公の来ることの遅きを怪しまば、当に何事に託して以て対ふべき。幸に先づ教へられよ。冀はくば異同あらざらんことを」と。公曰はく、「但だ実を以て告げよ」と。中使曰はく、「然らば則ち当に罪を得べし」と。公曰はく、「酒を飲むは、人の常情なり。君を欺むくは、臣子の大罪なり」と。中使嗟歎して去る。眞宗果して使者に問ふ。具に公の対の如くす。眞宗問ひて曰はく、「何故私かに酒家に入る」と。公謝して曰はく、「臣が家貧しくして、器皿無し。酒肆は百物具備し、賓の至ること帰するが如し。適〻郷里の親客遠きより来る有り。之と与に飲む。然れども臣既に服を易へ、市人も亦た臣を識る者無し」と。眞宗笑ひて曰はく、「卿は宮臣爲り。恐らくは御史の弾ずる所と爲らん」と。然れども此より公を奇とし、以て忠実にして大いに用ふべしと為す。

18 『市川白猿伝』江戸後期〜明治・菊池三渓

稱江戸俳優者、必以市川白猿爲巨擘矣。白猿爲人豪宕、尚気義。毎観其門下衆優演劇、詬罵曰、「劇部雖小技、亦不可以無気也。兒輩迂拙、其所爲皆傀儡屬焉耳。宜乎観者厭棄不顧也。」衆唯唯而退。白猿罵詈日甚一日。衆皆憤怨、謀託事殺之。一日衆優潜挾利刃、登場演劇、直薄白猿。凡劇部演撃刺之故事、悉須没刃刀。故白猿不知其利刃。機變百出、縦横當之。衆優無隙可投、辟易而遁。既而劇訖。白猿欣然、令人招衆優。衆優惶惧、相告誡曰、「事已発露。吾輩不知死所也。」駢首俯伏、莫敢仰見。白猿大具酒饌、自飲一觥、且囑之曰、「卿等今日技爾、絶類逸群。視諸平日、巧拙天淵、如出別手。」因具問其所自焉。皆俛首不答。研詰百方、始首其實。白猿大笑、撫掌曰、「不負我所見。」不復問其罪。聞者吐舌服其宏度。

○巨擘＝巨頭。○没刃の刀＝刃引き（刃を引きつぶして切れないようにした）刀。○惶惧＝懼れかしこまること。○觥＝つのさかずき。○視べる＝比べる。○首＝表す。

江戸の俳優を称する者、必ず市川白猿を以て巨擘と爲す。白猿の人と爲りは豪宕にして、気義を尚ぶ。毎に其の門下の衆優の劇を演ずるを観、詬罵して曰はく、「劇部は小技と雖も、亦た以て気無からざるべからずなり。兒輩迂拙にして、其の為す所皆傀儡の属のみ。宜なるかな観る者厭棄して顧みざるや」と。衆唯唯として退く。白猿の罵詈日一日と甚し。衆皆憤怨し、事に託して之を殺さんと謀る。一日衆優潜かに利刃を挟み、場に登り劇を演じ、直ちに白猿に薄る。凡そ劇部撃刺の故事を演ずるに、悉く没刃の刀を須ふ。故に白猿其の利刃なるを知らず。機變百出、縦横に之に当たる。衆優隙の投ずべき無く、辟易して遁ぐ。既にして劇訖る。白猿欣然として、人をして衆優を招かしむ。衆優惶惧し、相告誡して曰はく、「事已に発露す。吾が輩死所を知らざるなり」と。首を駢べ俯伏し、敢へて仰ぎ見るもの莫し。白猿大いに酒饌を具へ、自ら一觥を飲み、且つ之に囑して曰はく、「卿等の今日の技爾は、絶類逸群なり。諸を平日に視ぶれば、巧拙天淵にして、別手に出づるが如し」と。因りて具さに其の自る所を問ふ。皆首を俛して答へず。研詰百方にして、始めて其の實を首す。白猿大笑し、掌を撫して曰はく、「我の見る所に負かず」と。復其の罪を問はず。聞く者舌を吐きて其の宏度に服す。

19 『袁中郎全集』明代後期・袁宏道

夫迫而呼者、不択声、非不声。鬱与口相触、卒然而声、有加於択者也。古之為風者、多出於労人思婦。夫非労人思婦、為藻於学士大夫、鬱不至而文勝焉。故吐之者不誠、聴之者不躍也。余同門友陶孝若工為詩。病中信口腕、率成律度。夫鬱莫甚於病者。其忽然而鳴、如瓶中之焦声、水与火暴相激、忽而展転詰曲、如灌木之榮風、悲来吟往、不知其所受也。要以情真而語直、故労人思婦有時愈於学士大夫、而呻吟之所得、往往快於平時。

○鬱＝胸中にこもる様々な感情。○風＝『詩経』の中の諸国の民謡。詩経は詩三〇五編が、風・雅・頌の三部に分けて納められている。中でも風は庶民の生活感情を率直に謳っている。○労人思婦＝苦役に従事する者と夫を思う婦人。○藻＝詩文などの美しい言葉。○学士大夫＝学者や教養ある政治家。○律度＝韻律にかなった詩。

夫れ迫りて呼ぶ者は、声を択ばざるも、声ならざるに非ず。鬱と口と相触れ、卒然として声するは、択ぶに加はる者有るなり。古の風を為る者は、多く労人思婦より出づ。夫れ労人思婦に非ずして、藻を為るに学士大夫に於てせば、鬱至らずして文勝さる。故に之を吐く者誠ならず、之を聴く者躍らざるなり。余が同門の友陶孝若は詩を為るに工なり。病中口腕に信せて、率に律度を成す。夫れ鬱は病より甚だしきもの無し。其の忽然として鳴ること、瓶中の焦声の、水と火と暴しく相激つが如く、忽として展転詰曲すること、灌木の榮風の、悲来吟往するが如く、其の受ける所を知らざるなり。要は情真にして語直なるを以て、故に労人思婦は時有りて学士大夫より愈り、而して呻吟の得る所は、往往にして平時より快なり。

20 『晏子春秋』巻六の一条　中国戦国時代・著者不明

景公病水、臥十数日、夜夢与二日鬬、不勝。晏子朝。公曰、「夕者夢与二日鬬而寡人不勝。我其死乎。」晏子対曰、「請召占夢者。」出于閨、使人以車迎占夢者。至曰、「曷為見召。」晏子曰、「夜者公夢与二日鬬、不勝。公曰、『寡人死乎。』故請君占夢。」占夢者曰、「請反其書。」晏子曰、「毋反書。公所病者陰也。日者陽也。一陰不勝二陽。故病将已。以是対。」居三日、公病大癒。公且賜占夢者。占夢者曰、「此非臣之力。晏子教臣也。」公召晏子、且賜之。晏子曰、「占夢者以占之言対。故有益也。使臣言之、則不信矣。此占夢者之力也。臣無功焉。」公両賜之曰、「晏子不奪人之功、占夢者不蔽人之能。」

○景公＝春秋時代の斉の第二十六代君主。○病水＝腎臓を病む。○晏子＝晏嬰。斉の宰相。晏嬰の手腕により斉は繁栄する。○曷為＝何為。なにゆえに。どうして。○二日＝二つの太陽。日＝陽。太陽。●書←夢占いの書。●反す←参照する。

景公水に病み、臥すこと十数日、夜夢に二日と鬬ひて、勝たず。晏子朝す。公曰はく、「夕者夢に二日と鬬ひて寡人勝たず。我其れ死せんか」と。晏子対へて曰はく、「請ふ夢を占ふ者を召さんことを」と。閨より出で、人をして車を以て夢を占ふ者を迎へしむ。至りて曰はく、「曷為れぞ召さるる」と。晏子曰はく、「夜者公夢と二日鬬ひて、勝たず。公曰はく、『寡人死せんか』と。故に君に夢を占はんことを請ふ」と。夢を占ふ者曰はく、「請ふ其の書を反さんことを」と。晏子曰はく、「書を反す毋かれ。公の病む所は陰なり。日は陽なり。一陰は二陽に勝たず。故に病将に已まんとす。是を以て対へよ」と。居ること三日、公の病大いに癒ゆ。公且に夢を占ふ者に賜はんとす。夢を占ふ者曰っはく、「此れ臣の力に非ず。晏子臣に教ふるなり」と。公晏子を召し、且に之を賜はんとす。晏子曰はく、「夢を占ふ者占の言を以て対ふる。故に益有るなり。臣をして之を言はしむれば、則ち信ぜられざらん。此れ夢を占ふ者の力なり。臣に功無きなり」と。公両つながら之を賜ひて曰はく、「晏子は人の功を奪はず、夢を占ふ者は人の能を蔽はず」と。

＃